

# 霞

- 2010年度春季展示室だより -

土浦市立博物館

平成22年5月15日発行(通巻第11号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展示会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

## 古写真・絵葉書にみる土浦(11)

### 絵葉書「土浦市役所の全景」昭和15年頃



#### 目次

古写真・絵葉書にみる土浦(11)・・・	1
博物館からのお知らせ……………	1
【館長講座・土浦ミュージアムセミナー他】	
古代の農具・鉄製鋤先(古代)……………	2
小田家7代小田治久(中世)……………	3
江戸時代の醤油生産(近世)……………	4
大土浦市精密図(近代)……………	5
レンコン掘りに用いる道具(近代)……	6
市史編さんだより……………	7
「霞」短信 幼児教育コトハジメ展から	8
コラム(11)……………	8
情報ライブラリー更新状況……………	8

前川町(現中央2丁目。筑波銀行付近)にあった土浦市役所です。昭和15年(1940)に土浦町と真鍋町が合併し土浦市となり、土浦町役場が市役所の庁舎となりました。現在の下高津1丁目の庁舎は昭和38年(1963)に完成したものです。土浦市誕生を記念して発行された「空都 水郷の土浦」の一葉。【情報ライブラリー検索キーワード「土浦市役所」】

## 博物館からのお知らせ

### 館長講座(茂木雅博館長)

5月16日・6月20日・7月18日(全て日曜日) 時間:午後2時~

今年度は、平城遷都1300年記念特別講座と題し、日本の古代を振り返ります。

ところ:博物館視聴覚ホール

### 土浦ミュージアムセミナー

土浦地域の歴史について、学芸員の研究成果を紹介します。

6月19日(土)「武者塚古墳出土の銀製冠」

6月26日(土)「『沙石集』からみた中世土浦地方の様相」

7月3日(土)「沼尻修平 墨僊に影響を与えた従兄の横顔」

7月10日(土)「人物を語り継ぐ 沼尻墨僊の場合」

7月17日(土)「水郷の土浦 昭和時代初期の観光」 時間:各回午前10時から11時半まで

ところ:博物館視聴覚ホール 定員:各回50人(要申込み) 受講料:各回50円(資料代)

### 春季展示解説会

春季展示の見どころを、学芸員がご案内します。

5月22日(土)「江戸時代の醤油生産 『土浦ノ亀甲大二及ブモノナシ』」

5月29日(土)「大土浦市精密図 市制10周年の土浦」

6月5日(土)「レンコン掘りに用いる道具 「万能(まんのう)」」

時間:午後2時から(30分程度)

6月12日(土)「古代の農具・鉄製鋤先 開拓の象徴として」

ところ:博物館展示室3

6月26日(土)「小田家7代小田治久 北畠親房『神皇正統記』執筆時の小田城主」

2010年度夏季展示「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」は7月上旬~9月26日(日)までとなります。「霞」第12号は7/1(木)発行予定です。



博物館マスコット

亀城かめくん

お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

# 古代の農具・鉄製鋤先

## - 開拓の象徴として

土浦市田村・沖宿遺跡群にある尻替遺跡の火葬墓から発見された鉄製鋤先をご紹介します。平安時代前半期、9世紀代の火葬墓で、須恵器の甕に鉢をかぶせた骨蔵器に火葬骨を納め、鋤先はその横に写真のように副葬品として埋納されていました。

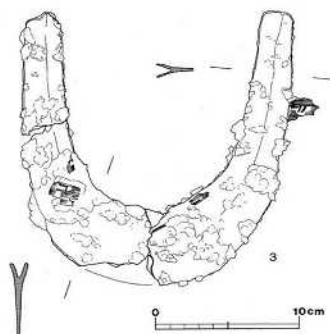
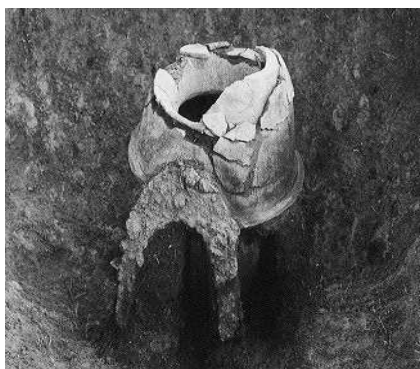
尻替遺跡の鉄製鋤先は幅約21.5cm、長さ約24.5cm、アルファベットの「U」の字に似た形の刃先で、内側の断面Y字状の溝に木製鋤本体を差し込む仕組みになっています。火葬墓と同時代、9世紀に当地で使用されていた農耕具で、鉄製の刃先のみが墓に副葬されたようです。

弥生時代に稲作と共に大陸から伝わった木製農耕具は、古墳時代に急速に鉄器化します。鉄製のU字形刃先は、古墳時代中期の5世紀頃に朝鮮半島から伝わった新式の農具で、鍬や鋤の刃先として土地の開墾や水田の耕作に木製農具とは比較にならない威力を発揮し、農具が機械化するつい最近まで使われた完成された姿の道具と考えられています。鍬は打ちおろす耕起具、鋤はすき込み反転させる耕起具で、5世紀に伝来したU字形刃先は、柄の形とその装着によって鍬、鋤どちらにも利用可能な農具と考えられます。

鍬先か鋤先かの区別は、刃先だけでは不明であり、尻替遺跡の鉄製鋤先も鍬先だった可能性も考えられなくはありません。平安時代の『和名類聚抄』では、「鋤・スキ」として「挿地起土也」、また「犁・カラスキ」として「墾田器也」と説明し、「鍬・クワ」については「大鋤也」とのみ記しています。犁は牛馬等に曳かせる耕起具で、U字形刃先と同様に朝鮮半島から伝えられたものと考えられています。ちなみに土浦市今泉町の谷津田で、古代（奈良～平安時代）に遡る水田面と考えられる土層断面から「すき込み」の痕跡が確認されています。犁による牛馬耕が行われていたかどうかは不明ですが、開墾や耕作に鉄製鋤先の利用が盛んだった様子が見られます。

尻替遺跡の鋤先は、骨蔵器の周りに充填された炭化材に突き刺すように立てかけられています。この火葬墓の被葬者は、骨の鑑定から成人の男性であることがわかっています。平安時代に開発された田村・沖宿遺跡群の開拓を牽引し活躍した男性の死に際し、彼の事績の象徴として副葬したのがこの地の開墾に力を発揮した鉄製鋤先だったのかもしれませんが。

(塩谷修)



鍬と鋤  
(石山寺縁起)  
『考古学による日本歴史』  
2 1996  
より

尻替遺跡の火葬墓と鉄製鋤先実測図(調査報告書『尻替遺跡』)2007より

6/12(土)午後2時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
根鹿北遺跡出土の瓦塔・瓦堂(古代・中世コーナーに展示)  
田村・沖宿遺跡群出土の二彩・三彩陶器  
(古代・中世コーナーに展示)



# 小田家7代 小田治久

きたばたけちかふさ じんのうしやうとう き

## - 北畠親房「神皇正統記」執筆時の小田城主

市内高岡の法雲寺には、南北朝時代の武将小田治久と伝えられている肖像画が残されています。治久とされるこの人物は、松の樹の下で脚の低い方形の椅子に座り、右手に払子（ほつす）を握って左手に鷹をとまらせており、このような肖像画は全国でもあまり例の見られないものです。

治久は、小田家6代貞宗の子として弘安6年（1283）に生まれ、後に尾張権守、宮内権少輔となっています。この頃の小田家は、治久の父貞宗とその弟の知貞の対立や、鎌倉幕府の北条氏一門に圧迫されるなどして勢力を大きく削がれています。そのため小田家は常陸守護職を失い、所領は筑波郡北条等の数箇所を保つのみとなってしまいました。

家督を継いだ治久は、かつて常陸国の大半を有していた小田家の隆盛を取り戻すべく、政治・外交と戦いに明け暮れた人生を歩んでいます。嘉暦2年（1327）高知（治久（註1）の初名）は、鎌倉幕府の命により父貞宗に代わって陸奥の安東氏の乱（註2）を平定。元弘の乱（1331～33年）（註3）では、常陸に流された万里小路藤房（註4）を預けられ、鎌倉幕府が滅亡すると藤房を連れて上洛し、後醍醐天皇の新政府に従っています。これにより、北条氏に没収されていた常陸守護職や失われた所領を再び得ましたが、建武2年（1335）に新政府に叛した足利尊氏が佐竹氏を常陸守護職としたため、治久は後醍醐天皇側に立って佐竹氏と戦をしています。治久が関東の南朝（註5）側の中心として戦った大きな理由は、常陸守護職と領地回復のためだったといえるでしょう。

暦応元年（1338）治久は後醍醐天皇の柱石ともいえる北畠親房（註6）を小田城に迎えています。親房は翌年小田城で南朝の正統を述べた『神皇正統記』を著しました。治久は北朝側の足利軍（高師冬）と戦いましたが同4年降参し、ついには足利軍に従って大宝城（現下妻市）を攻めています。その後治久は常陸介となり、文和元年（1352）に尊氏の命で入京し源氏への改姓を尊氏から許されました。しかし、常陸守護職も旧領も回復できぬまま同年12月に没しています。

（中澤達也）

- （註1）建武の新政後、後醍醐天皇の諱「尊治」を受け、治久と改名したといわれる。
- （註2）蝦夷の蜂起に関連して安東氏一族の内紛が発生。鎌倉幕府の追討を受け和談となる。
- （註3）後醍醐天皇による、鎌倉幕府を倒し公家政権の回復を企てた政変。
- （註4）後醍醐天皇の側近で建武新政府の恩賞方となる。市内藤沢に「藤原藤房卿遺跡」があり、県指定文化財となっている。
- （註5）南北朝時代の後醍醐天皇及びその皇位継承側をいう。室町幕府の北朝と対立。
- （註6）陸奥将軍府の北畠顕家の父。顕家の戦死後、小田城を根拠に活躍。



「（伝）小田治久肖像画」（部分）法雲寺所蔵

6/26（土）午後2時から  
このページで紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
東城寺経塚出土品（複製）：銅製経筒、妙法蓮華経など  
（古代・中世コーナーに展示）



# 江戸時代の醤油生産

## 「土浦ノ亀甲大二及ブモノナシ」



「関東醤油番付」

市)にある伊勢商人でした。霞ヶ浦 利根川水運の要衝であった土浦が醤油樽を江戸へ運ぶのに便利であったこと、小麦や大豆などの産地を控え、湖岸の温暖な気候も醸造に適していたことを見抜き、工場を田宿町(現大手町)に構えました。国分家に触発され、土浦の他の商人たちも生産に取り組むようになりました。

番付で国分家を探してみると、中央の三人の行司の下部、差添の筆頭に「大国屋勘兵衛」の名があります。力士とは別格の扱いで、醤油屋として一目置かれる存在であったことを示しています。

残念ながら肝心の商標「亀甲大」は、紙が傷んでいてはっきりとは読めません。是非ご覧になりたいという方には、博物館の庭園展示がおすすめです。明治時代になると国分家は土浦での醤油生産をやめ、東京日本橋で食品卸売業に専念するようになりました。屋根を飾っていた鬼瓦は、のれんを分けた大国屋徳兵衛家から博物館に寄贈され、現在は2階展示ホールから見える庭園展示の一角に据えられ、往時の風格を伝えています。

(木塚久仁子)

5 / 22 (土) 午後2時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
 土浦の醤油醸造を支えた地域(近世コーナー「城下町土浦」メッセージパネル)  
 凶作年柄醤油造家心得之事(近世コーナーに展示)  
 醤油屋仲間証文帳(複製)(近世コーナーに展示)



# 大土浦市精密図

- 市制10周年の土浦 -



「大土浦市精密図」(旧土浦町の部分)

土浦市は今年市制70周年を迎えます。70年前は昭和15年(1940)。その数年前から市制施行に向けての合併がはじまりました。昭和12年には中家村が、同13年には藤沢村虫掛が、同14年には東村が土浦町と合併、そして同15年に真鍋町と土浦町が対等合併し、土浦市(人口35,567人)は誕生しました。土浦市となっても同23年には朝日村荒川沖と都和村が、同29年には上大津村を合併、平成18年(2006)には新治村と合併し、現在に至っています。

写真は市制10周年を記念して製作された縦76.2cm、横108.0cm、縮尺1/3,000の大型の地図です。表面はカラーで、中央には江戸時代城下町であった旧土浦町、左手には旧中家村の一部、右手には旧真鍋町の一部、右上には土浦市全図(縮尺1/75,000)が示されています。また右下には川口川を埋め立ててできた祇園町全図と、戦前には製糸工場があり生糸の輸送に重要な地であった荒川沖町中心街図も配されています。地図上には商店や個人住宅などが細かく記され、地図の裏面には、120種を超える業種一覧が掲載されています。名称及び氏名・町名・番地・電話・索引(地図上の位置)の順で記され、旅館、川魚商、百貨店、映画興行など、今では少なくなった業種がこの時期たくさんあったことがわかります。現在の職業別電話帳や住宅地図にあたる地図といえそうです。

戦時中、本格的な空襲の被害を受けなかったこともあり、昭和25年頃の土浦は、城下町の面影を引継ぎつつ、そこに明治・大正・昭和時代の歩みが刻まれていた街でした。この地図からは水空間や人々の暮らしがその後大きく変化していく以前の土浦の様子を垣間見ることができます。(宮本礼子)

5/29(土)午後2時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(近代コーナーに展示)  
町村合併についての考察(昭和11年)  
土浦町真鍋町合併調査資料(昭和15年)  
市制20周年記念土浦市詳細図(昭和35年)



# レンコン掘りに用いる道具

まんのう  
- 万能 -

人間が他の動物と異なって高度な文明を築くことができた要因は、言葉・火の使用・道具の発明の3つにあると言われています。これは、言葉を用いて他者と意思を交換できるようになったこと、火を使用することによって様々な化学変化が利用可能になったこと、道具を発明することで手足のみよりも効果的に作業や運動が可能になったことを意味しています。太古から続く人間の暮らしの中では、様々な道具が生まれ、その土地その土地に即した改良が加えられてきました。

今回は、農業で用いた道具(農具)の中でも土浦地域で多く用いられた、レンコンを掘る道具としての「万能」を紹介したいと思います。万能は、主に水田で使われる道具で、大きく打ち下ろして深く土を起こすのに用いる耕起具です。形状は、木製の柄の先端に、3本から4本の鉄製の刃が接続しています。鍬などの他の耕作用道具と比べると、万能の刃は幅が狭いために刃数が多く、多くの土を掘り上げる効果があります。下の写真を見比べていただきますと、レンコンを掘るための万能は、通常の水田のものよりも柄の長さが短いことが分かります。この理由は、片手でも掘り上げるのに十分な力が伝えられ、作業ができるように工夫されたものであるからと考えられます。

またこの内側の刃は、中心から素直に分岐した形状ではなく、外側から内側に分かれています。これによって、柄の接合部分に手が差し込めるほどの間隔が空き、刃の根元を押さえることができます。実際に使用する場合も、持ち手は木の柄と刃の根元の2箇所を押さえながら地面を耕作していたそうです。刃先にも細いものと太いものがあり、耕す土の違いによって使い分けができるようにしていました。



レンコン用の万能



通常の万能

このようなレンコン掘りの万能は、少なくとも昭和40年代に九州地方で使用されたものが土浦に導入されたことが確認されています。当時は田の水を抜いてから耕作・収穫を行っていたので、胴体まで泥に浸って作業を行うことはありませんでしたが、深田の中で自由が利かない体勢になったり、1枚の田の中での移動も多かったことと思われます。レンコン掘りの作業に当たっては、道具は軽くて扱いやすいもののほうが効率良く進められたことでしょう。ちょうどこの時期は、土浦でも低地部分を中心に稲作からレンコン栽培への転作が始まった時期に当たっています。耕作用の道具も生産の変化に合わせてモデルチェンジをはかったといえそうです。

(比毛君男)

6 / 5 (土) 午後2時から  
このページでご紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
鋤(近代のコーナーに展示)



# 市史編さんだより

## ～ ～ ～ 『家事志第四巻』 米相場と諸物価の記録に注目！ ～ ～ ～

色川三郎兵衛家は江戸時代に土浦で薬種業と醤油醸造業を営んでいた商家です。当主である色川<sup>みなか</sup>三中から弟の美年<sup>みとし</sup>へと書き継がれてきた『家事志』の刊行が、このたび『第四巻』まで進みました。そこで、『家事志第四巻』を読むうえで注目点を紹介したいと思います。

書かれている年代は天保8年(1837)5月から13年4月までの5年間です。ご存じのように、天保4年から続く飢饉<sup>ききん</sup>がなお人々を苦しめている時代でした。また食料が不足するなか、商人である美年は、麦・塩・砂糖などの諸物価、とくに米相場の変動をこまめに記録しています。その記録を読むと色々なことが見えてきて興味深いものです。

はじめは、天保8年の米相場です。記録を抜き書きしてみました。どんなことが読みとれるでしょうか。米相場は、1両で買える米の量で表わされています。

「5月10日 3斗。 5月13日 此頃<sup>えきびょう</sup>疫<sup>なんじゅう</sup>病<sup>きゅうまい</sup>流行、中城分町中難<sup>ゆきだおれ</sup>渋<sup>ひと</sup>の者へ救米。 6月10日 人々水引難<sup>はっさく</sup>澁(灌漑用水不足)、当春中より東海道筋にて行倒者多く有之。 6月23日 米2斗3升。 8月1日 米4斗5升。 8月3日 八朔とも両日難なき故、諸相場も一きわ下げ可申候。 8月27日 新米5斗。」

5月には1両で3斗だった相場が、疫病の流行、日照りの懸念などにより、6月には2斗3升到りますが、8月も大過なく過ぎて収穫の予想が立つと、5斗に落ち着きます。とくに気象状況の影響が大きいことがよく分かります。

その他の要素によって相場が大きく動いている事例もあります。天保9年から10年にかけて、米相場は半値近くまで下落しました。以下はその記録を抜き書きしたものです。

「天保9年12月3日 5斗2、3升。 天保10年4月10日 5斗8、9升。 5月27日 6斗1、2升。 6月28日 7斗。 7月4日 雨なきは常総・下総・下野のみ、諸国近年<sup>まれなる</sup>稀成豊作。 7月24日 米相場売買更になし、相場定まらず7斗5升位。 9月15日 当所追々引下、9斗3、4升。 12月 1石1升。」

幕府が西丸御普請<sup>にしのみるごふしん</sup>についての御手伝金<sup>おてつだいぎん</sup>を諸大名に課したことが下落の原因の一つになっていると、美年は天保10年12月27日の日記に書いています。幕府は、天保9年3月に焼失した江戸城西丸再建の御手伝金として、多額の御用金<sup>ごようきん</sup>を諸大名に課しました。そのため諸大名は国元の百姓・商人に御用金を要求しただけでなく、換金のために御蔵米<sup>おくらまい</sup>を放出、米が余り気味の市場にさらに米がだぶつく結果になり、百姓や商人たちの思わくもからんで、米相場の大幅な値下がりを引き起こしたと指摘しています。

最後に、天保13年4月16日の日記を見ると、茶・薬種物<sup>やくしゅぶつ</sup>・醤油の値段が、数ページにわたり書き上げられています。特に薬種は「四月廿七日直引<sup>なびきおせつけ</sup>付られ、すなわち本書へ朱書にて差上候、諸商人残らず也」と朱書きで記され、「一角 目方<sup>いっかく</sup>壹<sup>め</sup>寸<sup>かたいちもんめ</sup>二付 買<sup>じゅうに</sup>十<sup>(朱書)</sup>式<sup>(朱書)</sup>寸五分、売十五寸 三分下・・・(以下略)」と薬種54品の値段の詳細が綿々と続く様子は圧巻です。これは老中水野忠邦の行った改革の一つで、諸物価の引き下げを目的としたものですが、お上に薬種値段の引き下げを強制されたことに対する、商人としての美年の意地が伝わってくるようです。

このように米相場や諸物価の記録に注目して読むことで、その時代の状況や色々な立場の人々のさまざまな思わくが見え、さらにその後ろにある歴史の大きなうねりを感じる事が出来ると思います。皆さんも江戸時代の歴史年表を片手に、米相場や諸物価の意味を読み解く楽しさを味わってみてはいかがでしょうか。

(市史編さん係非常勤職員 村田 茂子)

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、土浦市立土浦幼稚園前園長で、第31回特別展「幼児教育コトハジメ ～マチの学び舎、土浦幼稚園」の開催にあたり資料の借用等に多大なるご協力をいただいた吉田重郎さんにご執筆いただきました。

## 「幼児教育コトハジメ」特別展から

土浦幼稚園は明治18年(1885)創立、茨城県最初の幼稚園である。

小学校の設立が急務であって、その当時の日本には幼稚園を設置するまでの経済力はなかった。しかし、土浦は県南の商業の中心地で経済的に豊かであったから開園へとこぎつけたのであろう。

設立準備にあたっての教職員の研究・努力は特記すべきであり、当時幼児教育の最先端をいくフレーベルの「恩物」や多くの書籍・器具などの購入へと導いていった。大正期から昭和初期にかけて、やはり当時最新のモンテッソーリ教具を取り入れたり教具の開発製作も行っていった。大正13年(1924)には、モンテッソーリの「こどもの家」をモデルとした園舎の新築と園庭の造成の環境整備までに至った。

土浦幼稚園は常に最新の教育論を積極的に取り入れるが、消耗されかねない遊具、教具類を創立当初から今日に至るまで散逸させることなく数多く保管し続けてきた。

一方、「園外保育」で幼稚園周辺を散策する折り、商店の方々は仕事の手を止めて園児に声をかけてくれる。各種行事への協力及び参加支援など、創立当時から現在も変わらない地元、PTAの協力で支えられているのである。

今回の特別展の展示品は携わってきた人々の「もの」を大切にしたいと、高額の教育器具の購入を支えた土浦の経済力の融合であり、これまで幼稚園に関わったすべての人々の思いを具現化させたものである。

(土浦市立土浦幼稚園前園長 吉田重郎)

## コラム(11) 歴史からみる土浦の範囲

土浦市は平成18年(2006)2月に旧新治村と合併し、北西に範囲が広がり、より大きな市になりました。新治地区には、中世小田氏が壇越の法雲寺、古代には天台、鎌倉時代には律宗の影響が強い名刹東城寺や東城寺経塚群など、古代・中世の重要な史跡が数多く残されています。

現つくば市小田に居城した小田氏は、桜川河口の土浦城を家臣菅谷氏の持城としました。同じ立地にある穴塚般若寺は鎌倉時代には西大寺系律宗の寺院で、東城寺と共に結界石など固有の文化財を残しています。旧土浦町は江戸初期に桜川河口に整備された城下町ですが、その一帯は以前から上流の新治、筑波山麓地域と密接な関係にあったようです。東城寺や般若寺創建の背景には、古代に遡る筑波山の信仰やその周辺にある山岳寺院の影響も考えられます。小田氏興隆の背景も同様だったのではないのでしょうか。

江戸時代土浦藩の領域が桜川河口から新治地域、さらに筑波山南麓にまで及んでいるのは、歴史的な地域圏や領域形成の視点から重要な意味を持っているような気がしています。

(塩谷修)

## 情報ライブラリー更新状況

【2010・5・15 現在の登録数】

古写真 441点(+5)

絵葉書 347点(+5)

( )内は2010年1月5日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真もご覧いただけます。

## 霞(かすみ) 2010年度

春季展示室だより(通巻第11号)

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1～6ページのタイトルバック(背景)

は、博物館2階庭園展示です。

2010年度夏季展示は、2010年7月上旬～9月下旬となります。「霞」2010年度夏季展示室だより(通巻第12号)は7月1日(木)発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。